

平成30年5月5日発行(毎月5日1回発行)  
第58巻5月号(通巻706号)

# 風土



5

石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

高 蘆 の な か ゆ く 道 や 桃 青 忌

(句集「高蘆」より 昭和四十三年作)

桂郎師は「芭蕉忌」や「翁忌」、「時雨忌」と使わず、「桃青忌」と置きました。芭蕉が「桃青」と名乗るのは、江戸で俳諧宗匠として独立するころです。蘆原の中の一本の道を歩きながら、芭蕉の切り開いた未踏の俳諧の道を思うと、若き芭蕉の号の「桃青」を強く意識したのです。この道はまた桂郎師のこれからの道でもあるのです。「高蘆」が句集名になっていることからわかります。

枕 べ の 一 夜 の 共 寝 草 ひ ば り

(句集「高蘆」より 昭和四十三年作)

この句には「小林清之介さんより鉦叩、草ひばり、鈴虫を賜ふ」と前置きがあります。小林清之介氏は作家であり桂郎師の親友です。特に鳥や虫に見識が高く、著書もあります。秋の夜を鈴虫、鉦叩と楽しみながら、朝方に鳴く「草ひばり」で締めくくったのです。いずれもきれいな鳴き声ですが、暁のひんやりとした空気を震わす「草ひばり」が印象に残ったようです。

蟬時雨茂吉にへこむ畳かな

(句集「心後」より 平成五年作)

「茂吉」とは斎藤茂吉のこと、「茂吉にへこむ畳」から茂吉が戦後しばらく住んでいた最上川べりの「聴禽書屋」と思われます。ここを訪れた器氏は、茂吉が歌を詠み、また読み、食事をした常住坐臥の畳のへこみに目を注いだのです。「茂吉にへこむ畳」という措辞が茂吉を蘇らせています。

月さして畳を上げし柱立つ

(句集「心後」より 平成五年)

俳人協会刊行の「神蔵器集」の自註には「神田川が氾濫し、私の家も床上四十七センチの被害にあった。雨戸や襖も取り外され、畳も上げられた家は柱ばかり立って、月光は一層荒涼たる風景を現出した。」と書いてあります。骨だけになった家が、あり余る月のひかりに曝されている世界ですが、どこかに美を感じることも事実です。「月」という季語がそうさせるのかもしれない。

光もて余す  
南うみを

雪解もや原発ドーム覆ひえず

魚は氷に上り刈株つち色に

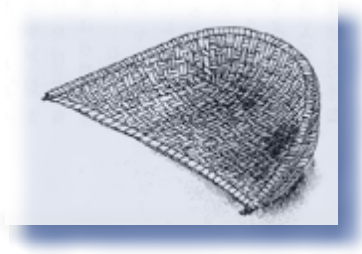
きさらぎの闇ゆがめをる焔かな

春の泥うちひろごりて陰の神

直会へ靴陸続と春の泥

悼

春の水渉るや足の浮くごとし  
春一番兜太キョーツと叫おらび果つ  
新しき地下足袋に泥鳥雲に  
朝日子にねぼけ眼のいぬふぐり  
メロディを奏でるうがひチューリップ  
下萌に深手負はせし脚立抜く  
露の姥入江は光もて余す



# 竹間集

同人作品



末黒野 浜 福恵

捨網に冬萌ゆ草のみどりかな  
浦灯台のま近かに干して一番若<sup>め</sup>布  
舟屋口舟屋裏へと若布干す  
野火守りの代替りして寡黙なる  
末黒野のその夜の雨の閑けさよ  
末黒野や若狭は低き山連ね  
末黒野や母のやうなる昼の月

豆撒き 門伝史会

豆撒きて毘沙門立ちの芸者衆  
まんさくや見番横丁路地伝ひ  
節分<sup>先師 神蔵宅火災に見舞はる</sup>詣銭湯残る神楽坂  
焼跡へ一步たじろぐ春寒し  
ヘルメット被りて入りぬ余寒かな  
冴返る灰の中より師の雅印  
料峭や濡れたる書籍日にさらす

初句会 鈴木石花

下校児に予報より早く雪降り来  
稀にして五寸の積雪朝日差す  
コーヒーに沖繩黍糖寒の夜  
天賞に傘寿の句選る初句会  
春はいつ日本海側猛吹雪  
天を指す梅林の枝先競ふ  
陽炎を追うて行く先父母の墓

日脚伸ぶ

山田暢子

体重計載つてはじむる春一日  
病める子に病める母なり春障子  
春の夜や亡夫が家を軋ませる  
余寒かな医師にまなこを覗かるる  
ミモザ咲くいつしか通ひ馴れし道  
捨てるものばかり日脚も伸びにけり  
まだ生きるつもり木の芽を和へながら

鶯

岩木茂

灯台の輝く日なり雛飾る  
月蝕の屋根より雪解しづくかな  
富士に雲末黒野くすぶりてをりぬ  
激しさも静けさもまた雪解川  
神子の浦ちぎれ若布を箆干しに  
一番若布干す雪嶺の光得て  
鶯や藍墨の書の匂ひ立つ

雪の日

小林輝子

口ばかり達者に年を迎へたり  
御降や庭ぬち抜くるけもの跡  
初電話白寿間近き匂友より  
寝たきりの犬に若水含まする  
太簪の集まる小鉢香のもの  
三夜降り身の丈尺余越えし雪  
雪の日を選べるやうに犬逝けり

竜の玉

田村すゝむ

俳縁の師にも恵まれ竜の玉  
大嵐弥生の町を掻き回す  
暖かなホーム内移動に車椅子  
介護所の廊下暖か写真展  
雛飾る京の百々町宝鏡寺  
猫もゐる寺に寝釈迦の絵説法

# 山河集

同人作品



南うみを選

春の雪 京都は小路多き街 上迂 蒼人

浅春や引き波強き和歌の浦  
探梅の句帳に挟む水の音

鼓草大地に微笑みこぼしをり  
山の日を集めて落の臺二つ

ぜんざいの鍋ごと届く女正月 落合 絹代

まんさくの花のひらがな遊びかな  
巖打つ波の白さや石尊採り

木洩れ日を分けて入る谷戸実朝忌  
一幅はわが筆の雛先づ掛けむ

お涅槃やがうがうと山迫り来る 雨宮 桂子

人選を迷つてゐたる鬼やらひ  
煩惱を断つごと五色椿かな

春光や重なり合へる魚の群れ  
あああの子もこの子もみんなしやぼん玉

まんさくや子の履いていく父の靴 中嶋 陽子

梅咲いて土竜の穴の点点と  
ともしびを秘め白梅のつぼみかな

啓蟄や漢方講座に耳を揉む  
地を掴む足の十指や下萌ゆる

梟に 皆既 月蝕 極まれり 四方由紀子

越前へトンネル毎に雪の増ゆ  
舟小屋の氷柱雫のかしましき

雪をゆく鴨のおぼつかなき歩み  
かいつぶり波に逆ひ何急ぐ



## 風土独語／南 うみを



浅春や引き波強き和歌の浦

上辻 蒼人

「和歌の浦」は、山部赤人が「和歌浦に潮満ちくれば湯を無み  
蘆辺をさして鶴鳴き渡る」と詠んだ和歌山の名勝地です。古生層  
の岩盤が海からそそり立ち、瀬戸内海と太平洋の出入り口なの  
で、干満時の潮の流れも速く、まさに「引き波強き」です。浅  
き和歌の浦の雄々しい景色が描かれています。

春立つやビルはひかりを奪ひ合ひ

雨宮 桂子

この句は「ビルはひかりを奪ひ合ひ」が読みのポイントになり  
ます。ひと昔前に比べ、現在のビルは超高層で壁面は硝子張が多  
くなりました。さらさらと光るビル群を仰ぐと、立春の光を奪い  
合っているように感じたのです。

ぜんざいの鍋ごと届く女正月

落合 絹代

元日を「男正月」と呼ぶのに対し、一月十五日の「小正月」を「女  
正月」と呼びます。暮れから正月の間、家事で忙しかった女性た  
ちがやっと手を休め、改めて新年を祝うのです。「ぜんざいの鍋  
ごと」が、甘党の女性たちの正月を象徴しています。

料峭の四肢身にはせず意にそはず

川田 好子

「料峭」は早春の寒さのことです。この頃の身体感覚はまだ春  
に慣れていません。手足が硬く、心も縮こまった感じですが。それ  
を「身にはせず意にそはず」と置き、ぎこちなさを伝えています。

まんさくや子の履いていく父の靴

中嶋 陽子

「まんさく」の語源は、春に先駆けて「まず咲く」とか群がり  
咲くので、「豊年満作」からと言われています。この句は取り合  
わせずに、子供の春の動きを「まんさく」に重ねました。自分の靴  
ではなく、父の大きな靴を履いて歩く姿に活発な成長が見られま  
す。

梅いちりん泉のやうな赤子の眼

奥田 茶々

これは「梅」と「赤子の眼」との取り合わせです。凛とした「い  
ちりん」の梅に対し、一点の曇りのない清浄な「赤子の眼」を「泉」  
に喩えました。大胆ですが納得します。

泉に皆既月 蝕 極 まれり

四方由紀子

「泉」は間を代表する鳥です。その「泉」に対し「皆既月食」  
という真の闇をぶつけました。間の中で泉の爛々とした目がク  
ローズアップされています。他の鳥に置き替えるはできません。

鶯餅そろりりとつまむここが羽

渡辺 やや

「鶯餅」は草餅や桜餅より早く、街の菓子屋に現れる春のさき  
ぶれの菓子です。富安風生の「街は雨鶯餅がもう出たか」がそれ  
をよく伝えています。作者は柔らかな感触を楽しみながら、「こ  
こが羽」と遊び心に浸るのです。

# 風土集



## 南うみを選

二ヶ月の富士は裳裾をちよと見せて 福生 雨宮 桂子

春立つやピルはひかりを奪ひ合ひ  
オペラシテイ最上階の余寒かな

春雨や向かひの窓に映るひと  
紅梅やこころ見透かされはせぬか

まんさくや祝言一つ村あげて 東京 川田 好子

料峭の四肢身にそはず意にそはず  
予定表は空欄なりし春一番

絵踏みせし末裔島に漁りて  
銀盤にをとこ舞ひみて二月尽 東京 奥田 茶々

梅いちりん泉のやうな赤子の眼  
目葉の耳まで垂るる雪解かな

雪形やはるか五竜岳の武田菱  
パスポート更新迷ふ春一番  
蜂蜜の底の白濁余寒なほ

弾むもの立春と書くペンの先 大和 落合 絹代

鎌倉彫の椀にコーヒー実朝忌  
兜太逝き選なき紙面春寒し

BGMのパイプオルガン若布干す  
いて来るものに靴音冴返る 宇治 渡辺 やや

蠟梅や母の齢を今日越して  
抜け道を蠟梅の香の通せんぼ

鶯餅そろりとつまむここが羽  
金輪際退かぬ気概や猫の恋

鳶の輪大きく春の立つ日かな  
昼かまくら一番乗りに異邦人 横手 森屋 慶基

外套のままかまくらの客となる  
千灯し銀漢のごと小かまくら

千支の戌飾る梵天唄添へて  
羽後訛柑塙に梵天押し合へり